

日本のダンスを 世界的コンテンツに

DANCE PRESENTATION UNITY

会長

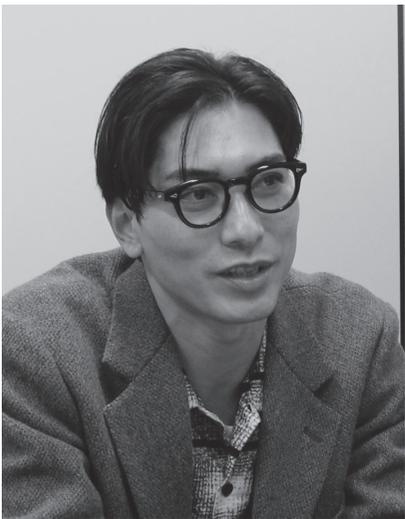
くにとも しんのすけ
国友 慎之助



聞き手

むらたて いさお
室館 勲

(株式会社 潮流社)
代表取締役社長



国友 慎之助 氏

【新潟発ダンスグループが世界で快挙】

— 国友さんが指導する新潟県発のダンスグループ「チビユニティ」が昨年、アメリカの世界的人気オーディション番組「アメリカズ・ゴット・タレント（AGT）」シーズン18に出場し、審査員から満場一致のゴールドデンブザーを獲得されました。これは大変な快挙だったと思います。本当におめでとうござい

ます。

国友 ありがとうございます。日本人として、ゴールドデンブザーの獲得は2組目、決勝進出も2組目ですが、これを同シーズンに獲得したのは日本人では初めての事例でした。本場に光栄に思う快挙でした。AGTはアメリカ国内外での視聴率が高く非常に影響力の大きな番組ですので、数億人の目に触れることができましたと思います。ダンスグループとしては非常に効果的だったと思います。

— チビユニティのこれまでの成果も素晴らしいものがあると思いますが、放送前後で環境の変化はありましたか。

国友 AGTに出て、価値観が大きく変わりました。いまでもアマチュアグループとして世界で有名ではありましたが、それがプロのフィールドに入ってきている部分も感じま

す。今後の在り方を改めて問う機会となりました。

我々は理念として「社会の役に立つダンスを創出したい」と考えており、産業化、雇用、社会問題への貢献に対してダンスで一石を投じたいと思っています。ダンスによる教育であったり、障害者や高齢者へのセラピーであったり、ダンサーのアイデア次第で、このエンターテインメントを使って社会に貢献することができると思っています。そうやって国内の人と人を結びつけると同時に、日本のダンス文化として世界に発信し展開し売っていく、巨大産業に食い込むことができる可能性があります。いまはそれを作り込んでいる最中ですね。

【母は「よやいこ」の火付け役】

——改めて、国友さんの生い立ちをお伺いできますか。

国友 私は高知県の生まれです。高知県で踊りといえば「よさこい祭り」の文化が有名だと思います。私の母は國友須賀と言いまして「よさこい」を全国に広めた張本人です。1950年代から始まった盆踊りである「よさこい祭り」を現代調にアレンジして、北海道の「YOSAKOIソーラン祭り」を始め、いや日本各地でよさこいが開催される火付け役となった立役者です。

——お母さんがよさこいのビッグカリスマ。ということとはやはり、国友さんも小さいときからダンスをしていたのですか。

国友 いえ、私は一身上の都合で父方に育てられ、ダンスはしておりませんでした。18歳から母方に行きまして、それがダンスを始め

たきつかけです。

——18歳からですか。18歳からダンスを始めるといえるのは、遅すぎないかなという思いはありませんでしたか。

国友 そうですね。周りは小さな頃からバレエやダンスを習っている子たちだらけですから、僕なんかはほんとに遅かったと思います。ただ、尊敬する母親に認めてもらいたかったという側面もあり、寝る間を惜しんで練習しましたね。

18歳から始めたダンスですが、母も私にさまざまな手をかけてくれました。海外留学や、当時の最先端を学ばせてもらい、経験を積ませてくれました。また当時、よさこいが全国的に発展していた時期で、北海道の「YOSAKOIソーラン祭り」、東京の原宿「スーパーよさこい」などにも出演させてもらいました。

た。これは私にとって大きな経験でした。全国を回って踊る中で、お年寄り子どもたちが一緒にチームを作って、交流をして、大会や祭りに出てものすごく満足感を得ている姿を見ました。また、障害者の方々のチームがあったり、幼稚園児や保育園児のチームがあったりと、踊りの文化がさまざまな人をつな

げていることを実感したのです。人と人とを繋げる上で、ダンスはものすごくいい文化的価値を持っているんじゃないかなと実感しました。

その上で「よさこい」は全国で祭りとして成功して、経済効果や観光価値など、新たな経済的価値創造にも成功したと思っています。それが踊りの文化で実現できていることを母が証明してくれたんです。それを若い頃に自分の目で見ていたので、将来は自分も、日本

を後押しできるようなコンテンツにダンスをしていきたいなと思ひまして、今に繋がっています。

——そこから現在の活動に繋がっているのですね。

国友 その後は、エンターテインメント分野も経験します。具体的には芸能プロダクションに所属して、舞台やドラマにも出演しました。そこで日本の現代の芸能コンテンツ、エンターテインメントの世界を学びました。実際、日本の芸能コンテンツは、ある種の既得権益が強いところもあって、意外と外への打ち出しが弱い部分もあります。それらの課題を目の当たりにしながら、私は違う方面で、日本のエンターテインメント文化を作れないかな、と思い、それにはやはりダンスだと思って、新潟に拠点を移したんですね。

【新潟から世界へ】

——新潟でダンスを。なぜ新潟だったのですか。

国友 先ほどのよさこいの全国行脚の中で出会った方々、特に子どもたちのダンスへのモチベーションの高さが要因です。ダンスを日本の文化的価値にまで高めるにあたって考えたのは、子どもたちを育成して、世界に影響力を発揮できる人を育てる必要があると思っただことです。そして、世界に対抗するほどのコンテンツに育てるために



必要があると思っただことです。そして、世界に対抗するほどのコンテンツに育てるために

は優秀な選手（踊り手）が必要です。全国行脚の中で、優秀でモチベーションの高い子どもたちに出会えたのが「にいがた総おどり祭」のある新潟だったのです。東京から2時間少々で行ける近さも要因の一つです。

始めは1年間、出張教室で東京から通いながらダンス教室をおこなったら、想像以上にたくさんの方が通ってくれました。当時小学5年生や中学生ぐらいだった彼らが、今でも私とともに活動してくれています。

——世界を狙うために。

国友 一番わかりやすいのはやっぱりKPOPです。KPOPは、韓国が国内人口が少ない中で、海外向けの商品として国を上げて作り上げられた側面があります。エンターテインメントを産業化したわけですね。おかげで今ではアメリカでもアジアでも、KPOPが

大きな影響力を持っています。この影響力はもう、日本のアニメコンテンツ以上のものに成長しているのです。アメリカでも今本当に大ブームになっていますし、SNSでもその振り付けをみんなが真似する。韓国はそれを作り上げることができたので、日本も見習うことは多いです。日本は、ある程度経済的にも豊かだったからこそ、商品を作るということに遅れがありました。英語教育も含め、ハードルが高いですね。でも海外向けの商品を作る上で日本のエンターテインメントコンテンツは頑張らなきゃいけないと思います。だから僕は、地方から世界に発信できる状況を作りたいなと思っていたので新潟を選びました。港町の新潟で、世界に向けて発信することに子どもたちが夢や希望を持ち、それを現実化できる。そして地方創生にも結びつく。

これがロールモデルになって広がればいいなと思います。

——ダンスは海外での活躍が目覚ましいですね。

国友 現在、チビユニティの出身者が中国のエンターテインメント番組で活躍していたりします。エンターテインメントとしては、海外では歌よりもダンスのほうが言葉の壁が無い分、伝わりやすいと感じています。踊りは万国共通です。どの国にも、祭りや踊りはあります。日本においても、神話のアメノウズメノミコトを始め、明治維新当時、京都の「ええじゃないか」など、日本のターニングポイントには踊りが関係していたとも言えます。——どのように世界一にたどり着いたのですか。

国友 これは日本のエンターテインメント

全体でそうなんですけれども、そもそもダンスにおいて「世界を目指す」という方はほとんどいなく、ある種、日本のダンスは鎖国状態だったんですよ。私が新潟に移住した際には、最初から「世界を目指してやります」と発信していました。地方から世界で戦う人を育てる、そのために地域全体を巻き込みました。2017年に子どもたちのプロジェクトとして「チビユニティ」を立ち上げました。世間の皆さんにまずは認知をしていただかなければいけなかったので、募金活動も始めたんです。「新潟の子どもたちが世界で挑戦します。応援してください」と。自分たちが行けばいいのではなく、地方の人たちに広く知ってもらって応援してもらうことが重要でした。クラウドファンディングで子どもたちの渡航費用

現在では新潟に限らず、北海道など日本各地でチビユニティのような動きが始まっています。このように各地で動きができれば良いと思います。

【ダンスを通じて社会貢献を】

——今後の展望などがありますか。

国友 チビユニティの出身者がすでに、ダンスエンターテイメント分野で世界で活躍しています。その中で私は、やはりダンスで社会的価値を発揮できる状況をもっと作っていきたいです。ダンスによって、経済効果だけではなく幸福度に結びつけられていること。そしてそれが学術的根拠に沿って数値化や可視化されることです。そのために大学や学者の方と連携していきます。そして、障害者や高齢者の方々にも貢献す

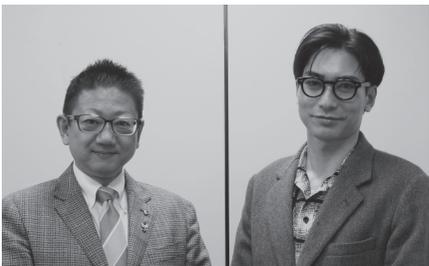
を集めたりしました。そして子どもたちも、ゴミ拾いイベントやチャリティイベントなどにもさまざまな出演して、新潟の皆さんから認知をしていただいて。そして運良く一年目で、アメリカの「VIBE」というダンス世界大会で優勝できました。「募金で支援した子どもたちが、世界で優勝しちゃったぞ」と地元でも話題になって、一層知名度も高まったのです。

こうしてチビユニティは毎年勝ち続け、今年4連覇という快挙を達成することになりました。勝ち続けるためには大義が大事だと思っていて、それが新潟の地元の方たちの応援だと思っています。支援してくれている人たちがいるから負けれない、という想いが、子どもたちの原動力になっているのです。

ることで「ダンスって素晴らしいよね」と愛されるコンテンツに仕上げていきたい。私が拠点にしている新潟においては、新潟が「ダンス大国」としてダンスで観光価値を見出した場所、教育的価値を見出した場所、そして経済効果をもたらした場所としてモデルになって、そのモデルを他の地方に展開していけたらと思います。

そのためには、ダンスのプロ集団として世界中で売れること。そのためのチャレンジをしていき、ブランディングもしながら売り込みをしていく。プロダンサーの育成、教育者の育成などを通じて、産業化して「稼げる人」を生み、雇用を生むこと。まだまだ道半ばですけども、頑張っていきたいですね。

また、新しいテクノロジーと融合してい



くことも大事ですので、ダンスはこれからVRやメタバースなどの技術とコンテンツを結びつけて、日本が先進的にできたら良いと思います。

——日本人は種目の中で戦うのは得意ですけれども、何かコンテンツを創造していくとか、新しい概念を作るといのは苦手ですから、ダンスにおいてはぜひ国友さんが新たな概念を作っていたら良いと思います。

国友 日本は観光地として非常に人気ですが、その一方で日本に住みたいという人は言葉の壁もあって、少ないようです。でもそれも、日本のダンスを学ぶためのダンス留学として日本に移住してくる人が現れるくらいの存在になればと思います。KPOPを学びに韓国に行きたいという人がいるように、日本も

一方で、世の中、ダンスが上手いだけの人はたくさんいるんです。ただ、なぜ僕たちが優勝できたか、優勝し続けられたかというところ、大義があったからです。何かを成し遂げる上で、必ず大義が必要だと思っています。その大義とは、募金活動を通じて町の方々から応援されている形

であり、施設を訪問してダンスで笑顔になってくれた人たちです。そういった支えの中で、君たちは何のために頑張るのか、という大義をきちんと明確に促せることが本当の先生だ

世界的コンテンツとしてダンスを成長させていきたいです。「日本のシルク・ド・ソレイユ」を作るぞと、夢は大きいですが、頑張りたいです。

——これからの日本のために、どんな人を育成していきたいですか。

国友 やっぱりこれからの日本を支えてくれるような子どもたちに対して、一体何ができるのかを考え続けなきゃいけない。トレンドも流行りも本当にすぐに変わってしまう中で、日本を中心に活動できる才能のある子どもたちをピックアップしていかなくちゃいけません。才能ある子どもたちと繋がれる、人と人が繋がれる機会を増やし、才能ある子を世界で活躍できるようにしっかりと育てていきたいです。

と思っています。そうした指導者も育成していきたいです。

——本日はありがとうございました。

■くにとも・しんのすけ

1981年生まれ。母親である國友須賀に師事。ニューヨーク、ロサンゼルス、ヨーロッパなどに渡り、バレエ、JAZZ、HIP HOP、コンテンポラリーを学び、独自のダンススタイルを探索し続けている。

指導する小学生～高校生までのメンバーで構成されたジュニアダンススクール「Chibi Unity」は、結成後わずか1年で世界大会優勝、その後も出場する大会で次々と優勝・入賞を繰り返し、一躍世界から注目される存在に。世界最大級のダンスコンペティション「VIBE Dance Competition」のジュニア部門「VIBE JRS」に優勝、史上初の4連覇を達成。

